

# The Happy Prince について

千葉 剛

## (一) *The Happy Prince* (『幸福な王子』)

*The Happy Prince* の内容をまとめてみると次のようになる。

### 1) 当時の社会への警鐘

①貧者や弱者の描写を通して、救いの手を待つ人々がまだ沢山いると思われる世相を暗示。

②ヴィクトリア朝時代の功利主義に対する反発と諷刺。

③社会の構成員(政治家、教授、一般民間人)の身勝手さを諷刺。

### 2) 宗教性

①当時の教会の存り方、すなわち儀式ばって形骸化してきたキリスト教への皮肉と諷刺。

②Bible の精神の具現化

Bible の “Greater love hath no man than this, that a man lay down his life for his friends.” (ST. John 15 : 13) や “give to the poor, and thou shalt have treasure in heaven.” (ST. Mark 10 : 21) の一節が、主人公の行為の一つの基調となっている。

③前の1) ②と重複するが、俗物の身勝手さを述べる事で、対照的に聖らかなものの尊さを強調。

### 3) Oscar Wilde の人間の一面

①*De Profundis* の中で “There was no pleasure I did not experience. ...But to have continued the same life would have been wrong because it would have been limiting. I had to pass on.” と言って、*The Happy Prince* もこのような意味もあって書き上げたと言っている。すなわち、書き上げる動機の一つに現実の自分の行為(homosexuality)に対する贖いの気持ちがあったと思われる。

②Wilde の性格の純粹さや人生観が表出している。(人間の苦悩を救えるのは、只自己犠牲的愛によるほかはない。)このような、他を生かすために自分を殺すというテーマは、*The Nightingale and the Rose* にも見られる。

### 4) 愛の本質

主人公の自己犠牲的の献身を通して愛の一つの形を訴えかけている。

### 5) Aestheticism

主人公の死が、Wilde の人生観に結びついている。

## (二) “The Mountains of the Moon”

この “The Mountains of the Moon” は、『幸福な王子』の中に、両眼を失った幸福な王子に同情したつばめが、彼の肩に止まって異国で見た事を話して聞かせる場面があるが、その中の一節、“...of the King of the Mountains of the Moon, who is as black as ebony, and worships a large crystal” に出てくる。この一見おとぎの国の言葉とも思われがちな “The Mountains of the Moon” (月の山脈) という言葉は、Wilde が造語した、全く架空の想像上の言語 (imaginative term) と考えるよりは、次の理由により、proper noun と考える方が妥当である。

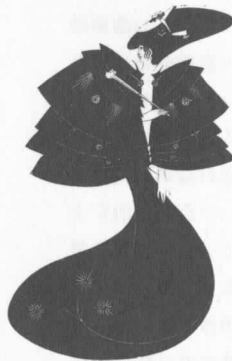
- 1) “The Mountains of the Moon” という言葉を、Ptolemy (127?—151) という古代の地理学者が自分の著作 (『地理学教程』) の中で、「ナイル川は “The Mountains of the Moon” から注いでいる」と書きしるしている事。
- 2) 19世紀のイギリスの拡張政策のため生じた Fashoda 事件などで、イギリス国民の眼が以前よりもアフリカに向けられ始め、アフリカ事情への国民の関心が高まりを見せ始めた事。Wilde はそのような時期に生まれ育ち、当然イギリス国民の一人としてアフリカに関心を向けたであろうと思われる事。
- 3) John Hanning Speke (1827—1864 ; 1862年7月28日、ナイル川源流発見。ナイル川は “The Mountains of the Moon” から注いでいるという古代人の記述を、伝説上の物語にしてしまう。) や Sir Henry Morton Stanley (1841—1904 ; 1874~1877年ナイル川源流探検。“The Mountains of the Moon” と呼ばれていた山を “Ruwenzori 山” として、初めて正確に地図に位置付ける。) を始めとするアフリカ探検、とりわけナイル川の源流探検の事が、新聞・雑誌・著書等を通じて、イギリス国民に多くの興味を呼び起こした事。これはいわば、二十世紀に入ってからの月旅行計画に匹敵する程の一大ニュースだった事。このために、1700年もの間眠っていた “The Mountains of the Moon” という言葉が、ナイル川源流との関連で脚光を浴び始めて、Wilde がこの言葉を学校の先生の話や長じて後、当時のマスコミを通じて知ったと推量される事。
- 4) Speke が自分の著書 *Journal Of The Discovery Of The Source Of The Nile* (1863) の中で、“The Mountains of the Moon” を proper noun として用いている事。
- 5) Wilde が *The Happy Prince* を構成し書き上げる迄には、上のような国情や社会的背景があって、この作品の中でアフリカに関する用語 (The Nile, The Sphinx など) が沢山使われているのも、そのような社会的情勢と無関係とは思われない事。当然 Wilde は、“The Mountains of the Moon” を Speke と同様に、アフリカの山の名前

の一つであるとの認識をもって使用したと思われる事。

- 6) 辞書 *New Century Cyclopedia Names* (1954) の定義でも “The Mountains of the Moon” は “Ruwenzori 山” を指す別名 (proper noun) と規定している事。
- 7) アフリカに対する指向性が、異国的なものや未知のものに対する憧憬心と相俟って、Wilde 自身の中に内在していた事は、“*The Sphinx*” (1883年起稿し、1894年に刊行) で実証されている事。

以上の理由から Wilde は “The Mountains of the Moon” を proper noun, すなわち「アフリカの地名 (又はその別名)」として、*The Happy Prince* の中で用いたと考える方が妥当である。又、この事は、時代の流れや社会性に敏感に反応していた Wilde の作家としての資質の一面を示すものでもある。

(これは昭和58年12月10日、「日本ワイルド協会第8回大会」で発表したものの要約である。) (東京農業大学専任講師)



### 日本ワイルド協会夏期セミナー

## 『ワイルドと世紀末』

第1日 7月7日(土)午後2時~午後5時  
挨拶. 井村君江(協会会長)  
発表. 「ワイルドの詩と世紀末都市」  
堀江珠喜(園田学園女子大学専任講師)  
「20世紀へ向う19世紀末のワイルド」  
アートロ. シルバ(ELEC講師)

第2日 7月8日(日)午前10時~午後12時  
シンポジウム 「ワイルドと世紀末」  
司会 荒井良雄(駒沢大学教授)  
発題者 西村 孝次(元明治大学教授)  
川崎淳之助(立教大学教授)  
井村 君江(明星大学教授)

日時. 昭和59年7月7日(土), 8日(日)

場所. 大学セミナーハウス

〒192-03 八王子市下柚木 0426(76)8511~3